7　山陰・山陽地方の鬼瓦

志賀　崇・松尾　佳子

A　はじめに

山陰・山陽地方の鬼瓦について、以下のように分担執筆した。

岡山県（備前国・美作国・備中国）：松尾佳子、広島県（備後国・安芸国）・山口県（周防国・長門国）・鳥取県（因幡国・伯耆国）・島根県（出雲国・石見国・隠岐国）：志賀 崇

B　岡山県（備前国・美作国・備中国）の鬼瓦

岡山県出土の鬼瓦は、16 遺跡 28 例を数える（第１図）。ただし、旧国単位では備前４遺跡、美作１遺跡、備中 11 遺跡となり、備中での集中が顕著である。また内容的にも飛鳥時代から平安時代まで比較的面的に分布する備中の事例は充実している。そこで、今回は備中出土例を中心にして時代順にその様相を概観したい。

ⅰ　飛鳥時代の蓮華文鬼瓦

２遺跡２例あり、いずれも備中（第２図）。１つは末ノ奥窯跡（総社市宿）からの出土で、平吉遺跡（奈良県明日香村）へ供給されていることが確認できる。格子文と推定 29 個の連珠文の内には弁端に点珠をもつ素弁八弁蓮華文を配する。中房の蓮子は平吉遺跡出土例から１＋８。下端中央に半円形の抉りが見られる。焼成は軟質。末ノ奥窯跡では、鬼瓦、軒丸瓦（奥山久米寺式・船橋廃寺式）、丸瓦、平瓦、鴟尾・塼などの瓦類の他、６世紀末から８世紀前半に須恵器を焼成しており、その一部は古代山城である鬼ノ城へ運ばれていることが胎土分析の結果明らかにされている。

２例目は箭田廃寺（倉敷市真備町箭田）からの出土。箭田廃寺は発掘調査が行われておらず、鏡林山吉備寺の境内に心礎と礎石５個が残る。鬼瓦は吉備寺門前の水田より出土した。格子文と連珠文の内に２条の圏線が巡り、その内には弁端に点珠をもつ素弁（推定七弁）を配する。厚さは上端で３cm、花弁部で 4.7cm を測り、前述の末ノ奥窯跡出土例に比べると分厚く作られていることから、後出的であるとされる。

ⅱ　備中式蓮華文鬼瓦

４遺跡５例（第３図）あり、備中式軒丸瓦に組み合うことが明らかにされている（妹尾 2010）。頭部が弧状の方形を呈し、下端は方形の切込み、両端は斜めに切り落としている。

瓦当文様は重弁蓮華文の周囲に珠文、下両隅は三角形文が配される。また周囲は複合鋸歯文帯等で飾られる。中房蓮子は秦原廃寺（総社市秦）が１＋８、箭田廃寺は中房の真ん中に大きな珠文がのる。

箭田廃寺出土品については、同笵品が岡山市東区中尾の造成地より出土していたことが明らかとなった。同笵品には下端の方形切込みや、両端の斜め切り落とし、背面の固定装置などが認められず、屋根材として使用する意図が感じられない。出土地も備前地域であることから、詳細については今後の課題である。

iii　その他の蓮華文鬼瓦

関戸廃寺（笠岡市関戸）出土品をあげる（第４図）。軒丸瓦Ⅰ類（西琳寺式）と組み合うと思われ、金堂北東角の隅棟先端に使用されたと想定される。形状は方形を呈し、上端辺は若干の丸みをもつ。また下端には半円形の切込みがある。瓦当文様は単弁 14 弁で、周囲には珠文 18 個、両脇には突線による半円形、四隅に弧状の沈線文が配置される。側面はケズリ、裏面はナデによる調整。

iv　平城宮式鬼瓦

備中では平城宮式系鬼瓦の分布が広く見られる。現在までに５遺跡８例（第５・６図）が知られ、平城宮Ⅲ式系とⅣ式系に大別できる。Ⅲ式系は矢部遺跡（備中国津峴駅家推定地、倉敷市矢部）と岡田廃寺（倉敷市真備町岡田）、Ⅳ式系は備中国分僧寺跡（総社市上林）、八高廃寺（倉敷市真備町妹）そして関戸廃寺からそれぞれ出土する。いずれの遺跡においても平城系軒瓦が見られることから、セットで導入しているのだろう。

備中国における平城系軒瓦の採用は、その製作技術と共に地方官衙整備に伴い導入され、その後の国分寺創建瓦にも大きく影響する。したがって、これら平城系瓦のあり様を明らかにすることは、地方官衙整備の実態を探るうえで重要な検討課題であると考える。

このほかの岡山県内出土の鬼瓦は、第７図に示した。　（松尾佳子）

C　広島県（備後国・安芸国）の鬼瓦

広島県からは 11 遺跡で鬼瓦が出土している（第８図）。旧国単位では、備後 11 遺跡であり、安芸では古代に属する鬼瓦の出土は確認されていない。今回はこのうち、特異な文様をもつ蓮華文鬼瓦と、備後南部で分布する重圏文系鬼瓦を取りあげたい。

i　特異な文様の蓮華文鬼瓦

内砂子瓦窯跡（福山市神辺町）から特異な文様をもつ蓮華文鬼瓦が出土している。形状

はアーチ形とみられ、中央に１＋４の蓮子を配した中房を置き、その周りを鋸歯文と考えられる凸線と一条の圏線で囲む。その外側には大ぶりの花弁を凸線で表し、花弁内に中房と同じ凸出文様を配している（第９図１～３）。このような文様の類例は知られておらず、系譜関係は明らかでない。また、この鬼瓦のほかに法隆寺式の複弁八弁蓮華文軒丸瓦の出土が知られている（第９図４）。なお、これらの瓦の供給先は明らかになっていない。

ⅱ　重圏文系鬼瓦

重圏文系鬼瓦は、備後南部の備後国分寺跡（福山市神辺町）、小山池廃寺（福山市神辺町）、岡廃寺（福山市加茂町）、中島遺跡〈最明寺跡南遺跡〉（府中市駅家町）、備後国府跡（府中市元町ほか）、伝吉田寺跡（府中市府中町）、前原遺跡（府中市父石町）で確認されている（第 10 図）。

これらは、備後国府跡金龍寺東地区出土例（第 10 図 13）とそれ以外とで文様構成が大別される。後者は全体がある程度わかる伝吉田寺跡出土例（第 10 図１～４）及び岡廃寺出土例（第 10 図５）によれば、外形はアーチ形を呈し、下辺中央に抉りを有する。外縁は素文の直立縁で、内区にアーチ形に沿った２本の凸線をめぐらし、中央部にも２本の縦の凸線を配する（アーチ形の凸線と縦の凸線が井桁状に交差するものと、交差しないものがある）。また、２本の縦の凸線の間に釘穴を有するが、釘穴の位置は各例で異なっている。一方、備後国府跡金龍寺東地区出土例は全体のほぼ半分が残存しており、中心で折り返して文様を復元すると、外縁は素文の直立縁で、内区には彫の浅い２本の凸線を上下左右に井桁状に交差させ、その交点から脚部に向かって１本の凸線を弓なりに配する。また、左右の２本の凸線の間と外縁に沿って円形の浅い押捺文が施される。そして釘穴は、井桁状の交点の中央と脚部下端に穿たれている。

さて、重圏文を飾る鬼瓦としては、後期難波宮出土例が知られる。後期難波宮の重圏文系鬼瓦は３本の凸線からなり、軒瓦の文様と共通するデザインが採用されている（山本 1988・八木 2010）。一方、備後では、備後国分寺跡等から重圏文系軒瓦が出土しているが、上記の重圏文系鬼瓦が出土する他の遺跡では確認されておらず、これらの遺跡では平城系軒瓦が広く展開している（妹尾 2014a・b）。中島遺跡は古代山陽道の品治駅家、前原遺跡は葦田駅家と推定されており、また伝吉田寺跡は備後国府と密接な関係を持つ寺院と考えられている。したがって、備後の重圏文系鬼瓦は備後国内の官衙関連施設を中心に、その整備・補修に伴って導入され、その時期は８世紀中葉から後半であると考えられる。ただし、通例の鬼面文ではなく、この文様が広く採用された背景については明らかでない。なお、備後国府跡金龍寺東地区出土例は文様が形骸化して後出的であり、９世紀の瓦葺き礎石建物に伴うとされる。

このほかの広島県出土の鬼瓦は、第 11 図に示した。

D　山口県（周防国・長門国）の鬼瓦

山口県では３遺跡から鬼瓦が出土している（第 12 図）。旧国単位では、周防２遺跡、長門１遺跡である。ここでは、周防国分寺跡出土鬼瓦を取りあげる。

ⅰ　平城宮式鬼瓦

周防国分寺跡（防府市国分寺町）の西限とみられる溝から鬼面文鬼瓦（第 13 図１・２）が出土している。外形はアーチ形を呈し、鬼面は上下の歯牙をむき出し、顎下に放射状の髭及び荒い巻毛を配する、いわゆる平城宮Ⅲ式系である。周防国分寺では、単弁八弁蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦（第 13 図３・４）が創建瓦とされ、これらと同時期とされる。

このほか、周防では、周防国府跡（防府市国衙）で掘立柱建物（平安時代中頃）の柱穴から柱の基礎固め（礎盤）として使用された鬼面を表した土製品（鬼面瓦）が出土している。屋根に葺かれた鬼瓦を転用したものか否か明らかでないが、何らかの祭祀的な意味合いがあるものとされる。また、長門では、長門深川廃寺（長門市西深川）から鬼面文鬼瓦の小片が出土しており、外区内縁に唐草文をめぐらせた単弁八弁蓮華文軒丸瓦（出雲・来美廃寺等に同文瓦）や均整唐草文軒平瓦とともに金堂で使用されたと考えられている。

E　鳥取県（因幡国・伯耆国）の鬼瓦

鳥取県では５遺跡より鬼瓦の出土が知られる（第 15 図）。旧国単位では、因幡１遺跡、伯耆４遺跡である。今回は、大御堂廃寺出土鬼瓦と伯耆国分寺跡出土鬼瓦を取りあげる。

ⅰ　大御堂廃寺出土鬼瓦

大御堂廃寺（倉吉市駄経寺町）より２型式３種（蓮華文〈Ⅰ類〉、鬼面文〈Ⅱ類ａ・ｂ〉）の鬼瓦が出土している（第 14 図）。

Ⅰ類（第 14 図１）　上辺が丸みをもつ縦長の方形を呈し、下辺中央に半円形の抉りを有する。中央に単弁八弁蓮華文を配し、中房は平坦で蓮子はなく、中央に方形の釘穴が穿たれる。蓮弁は平面的な表現で先端が丸く、大型の子葉を配する。間弁はない。外区内縁は圏線で画され、大型の珠文を置く。珠文の間には凸線でＴ字状文様を配置する箇所がある。外区外縁の上半部には段型状の文様が飾られる。裏面には同心円のタタキ目が残り、側面はナデ調整。

Ⅱ類ａ（第 14 図２）　外形はアーチ形を呈し、下辺中央に半円形の抉りがある。鬼面を大きく表し、下方に腕と足を配し、蹲踞する姿につくるが、胴部の表現はない。額部分に方

形の釘穴を設ける。眉は鹿角状を呈し、耳は火焔形で表され、上牙をむく。腕と脚にはそれぞれ手甲と脚甲をつけた表現がある。外区外縁には、下端部を除き、細い凸線が施される。裏面はほぼ平坦だが、指頭圧痕が残る。側面はヘラケズリ。

Ⅱ類ｂ（第 14 図３）　Ⅱ類ａと基本的に同じ構成の鬼面を表すが、外区外縁の凸線が２条になる。また、釘穴は眉間に設けられる。笵型に粘土を押し込みナデによって成形後、同じ厚さの粘土板を重ね、縄タタキを施して接合する。側面はヘラケズリ。Ⅱ類ａに比べて厚く作られ、後出的と考えられる。

Ⅰ類・Ⅱ類ともに他に類例のない鬼瓦である。Ⅰ類は円頭で縦長の方形を呈することや、他地域の蓮華文を飾る鬼瓦に比べて蓮弁の形状や大形の珠文を配する点などで後出的な要素が認められ、７世紀末頃に位置づけられる。なお、この時期、大御堂廃寺では軒瓦の出土比率から本格的な伽藍整備が行われたと考えられている。一方、Ⅱ類については、統一新羅の鬼瓦（第 14 図４）との関連が指摘されてきた（近江 1967）。大御堂廃寺では新羅的な要素が認められる軒丸瓦が出土しており、伽藍の補修瓦として使用されている。中でも軒丸瓦Ⅻ類と胎土の状況が近いとされ、８世紀第３四半期に位置づけられている。

ⅱ　伯耆国分寺跡出土鬼瓦

伯耆国分寺跡（倉吉市国分寺）では４種の鬼瓦が出土している。これらはいずれも鬼面文で塔所用と考えられており、このうち全容がわかるのは第一種と第二種である。第三種及び第四種は第二種と同系統のものと考えられているが、小片のため詳細は不明。

第一種（第 16 図１）　外形は方形に近く、上辺はわずかに弧状を呈し、下辺中央には浅い刳りこみがある。鬼面はダイナミックに憤怒の形相を表し、外縁はない。３個体出土しており、うち１個体のみが眉間に釘穴を有している。二次的な火を受けて変色しており、天暦二（948）年に起きたとされる火災との関連が想定されている。

第二種（第 16 図２）　外形はアーチ形で、下辺中央に半円形の抉りがある。鬼面は線描き風の簡略化されたもので、外縁は直立縁で素文。斎尾廃寺（東伯郡琴浦町）で同系統の鬼瓦の小片（第 18 図１）が出土している。

第一種は釘穴の有無によって固定の仕方が異なるが、共通して上辺に沿った幅 2.3cm、深さ２cm、長さ 26cm あまりの弧状の欠きとりが認められる。これは上方（後方）から鬼瓦を固定するための“かかり”と考えられ、鬼瓦上部に鳥衾として軒丸瓦を据えるのではなく、井内功氏が「（棟端）飾瓦用平瓦当つき平瓦」（井内 1969）と呼ぶような特殊な軒平瓦、あるいは凹面に何らかの突起がついた平瓦（雁振瓦）を用いた可能性を指摘しておきたい。

このほかの鳥取県出土の鬼瓦は、第 17・18 図に示した。

F　島根県（出雲国・石見国・隠岐国）の鬼瓦

島根県では 16 遺跡より鬼瓦が出土している（第 20 図）。旧国単位では、出雲 13 遺跡、石見 1 遺跡、隠岐 2 遺跡である。古代出雲国の中心地であった出雲国府跡周辺に出土地が集中する。このうち、鬼瓦の全容がわかる来美廃寺出土鬼瓦と出雲国分寺跡出土鬼瓦を取りあげる。

i　来美廃寺出土鬼瓦

来美廃寺（松江市矢田町）は『出雲国風土記』に日置君目烈が造営したと記される「山代郷（北）新造院跡」である。鬼瓦は 5 個体以上出土しており、すべて同一笵によって作られたもので、第 1 基壇（塔）及び第 2 基壇（金堂）から出土した（第 19 図 1 ～ 5）。

外形はアーチ形を呈し、中央下方に半円形の抉りがある。鬼面の外側には凸線で区画された中に密な珠文を置く。眉間は W 字状で、直下に弧状の眉が描かれる。耳は渦巻状で、両眼と鼻は高く突出し、口は大きく開き、上牙上方の口端に徽をよせる。また、口の両側には顎鬚が短く斜行する。これらの特徴は南都七大寺 II 式に共通するものである。

「抉りの規定」は縦長半円形とみられるが、この規定部分をすべて切り取るか、あるいは切り残すことによって脚部長の調整が行われている。また、規定部分をすべて切り取るものには鼻上部に釘穴があり（鼻孔の表現もある）、切り残すものには釘穴（鼻孔も）がみられない。使用する建物や棟の種類の違いに起因するものと考えられる。抉りの幅は約 12cm で、この大きさは長門深川廃寺系の瓦当文様を持つ軒丸瓦 V 類（第 19 図 6）の径とほぼ一致し、これと組み合う可能性が高いとされる。軒丸瓦 V 類は第 1 基壇の造営に伴って導入され、7 世紀末～ 8 世紀初頭に創建された第 2 基壇の補修にも用いられている。

南都七大寺 II 式は天平勝宝年間（749～757）に比定されており（毛利光 1980）、来美廃寺の鬼瓦はこれ以降に位置づけられる。ただし、来美廃寺で南都七大寺 II 式系の鬼瓦が採用された背景については明らかでない。法隆寺西院伽藍（奈良県斑鳩町）で出土する南都七大寺 II 式の固定方法は把手であり、また、延長・短縮による鬼瓦の大きさの調整は行われていない（岩戸 2001）。

なお、出雲国内では松之前廃寺（松江市玉湯町）で同系の鬼瓦（第 23 図 5）が出土しているが、来美廃寺例に比べるとかなり小型である。

ii　出雲国分寺跡出土鬼瓦

出雲国分寺跡（松江市竹矢町）では長らく八雲立つ風土記の丘資料館に寄託されている鬼瓦が知られていたが、近年、個人から松江市に寄贈された資料がこれと接合することが判明した（松江市教委 2019）。また、窯跡資料である中竹矢遺跡（松江市竹矢町）出土資料と合成することにより、ほぼ文様構成が明らかとなっている（第 21 図）。それによれば、

外形はアーチ形を呈し、外周には珠文帯を配する。鬼面の中央上部には宝珠が丸みを帯びた凸線で表現され、その両脇には木葉状文様が表される。宝珠の下には半球状の突起があり、その左右には眉が凹凸線で表現され、目は半球状に突出する。鼻は大きく、鼻孔を見せる。

出雲国分寺跡周辺では、上述の中竹矢遺跡のほかに、出雲国分尼寺跡（松江市竹矢町）・出雲国府跡（松江市大草町）でもよく似た鬼瓦が出土している（第 22 図）。これらは、外周に珠文帯を持つものと持たないものに分かれ、前者は出雲国分寺跡・出雲国分尼寺跡・中竹矢遺跡、後者は出雲国分尼寺跡・中竹矢遺跡・出雲国府跡で確認されている。詳細な検討はできていないが、これらの鬼瓦は中竹矢遺跡を含む出雲国分寺瓦窯跡群から供給されたものと考えられる。出雲国分寺瓦窯跡群は出雲国府が生産を管理した国衙系瓦屋と考えられており（大橋 2009）、国の主体的な関与がうかがわれる。

このほかの島根県出土の鬼瓦は、第 23 図に示した。

（志賀　崇）
（雲南市教育委員会・岡山県古代吉備文化財センター）

謝　辞

広島県の鬼瓦について、妹尾周三氏よりご教示をいただきました。また、出土鬼瓦一覧表の作成にあたり、福田ことり氏（鳥取県）、高田遼和氏（島根県）の協力を得ました。記して感謝申し上げます。

参考文献

安東康宏・岩崎仁司 1997「関戸廃寺」『笠岡市埋蔵文化財発掘調査報告３』
井内　功 1969「古代棟端飾瓦の固定方法」『井内古文化研究室報２』
伊藤　晃・松本和男 2000「吉備最古の軒丸瓦と鬼瓦」『古代瓦研究Ⅰ』
岩戸晶子 2001「奈良時代の鬼面文鬼瓦－瓦葺技術からみた平城宮式鬼瓦・南都七大寺式鬼瓦の変遷－」『史林』第 84 巻第３号
近江昌司 1967「伯耆駄経寺址出土鬼板の源流－新羅時代に於ける一類の鬼板－」『朝鮮学報』第 43 輯
大橋泰夫 2009「考古学からみた『出雲国風土記』の新造院と定額寺」『国士舘考古学』第５号
岡遺跡発掘調査団 1972『岡遺跡発掘調査報告書』
梶原義実 2010『国分寺瓦の研究』
片岡詩子 2012「松之前廃寺」『松江市史』史料編２考古資料
神辺郷土史研究会 1980『神辺の古代寺院跡－神辺の歴史と文化』第７号
倉吉市教育委員会 1970『伯耆国分寺跡発掘調査報告Ⅰ』
倉吉市教育委員会 2001『史跡　大御堂廃寺発掘調査報告書』
真田広幸 1997「第五部　山陰道　第一　伯耆」『新修国分寺の研究』第７巻補遺
島根県教育委員会 1983『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』
島根県教育委員会 1992『一般国道９号線松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ（中竹矢遺跡）』
島根県教育委員会 2002『来美廃寺－「山代郷新造院」推定地発掘調査報告書－』
島根県教育委員会 2007『史跡山代郷北新造院跡－出雲国山代郷遺跡群北新造院跡（来美廃寺）発掘調査報告書－』
島根県教育委員会 2009『史跡出雲国府跡６』
島根県教育委員会 2019『史跡出雲国府跡 10』
周防国府跡調査会・防府市教育委員会 1998『周防国府跡第 98 次発掘調査概報』

杉原和恵 2004「周防国分寺」『防府市史』資料Ⅱ考古資料・文化財編
妹尾周三 2009「西瀬戸内の法隆寺式軒瓦」『古代瓦研究Ⅳ』
妹尾周三 2010「備中の重弁蓮華文軒丸瓦－備中式を中心に－」『古代瓦研究 V』
妹尾周三 2014a「中国地方の重圏文系軒瓦」『古代瓦研究Ⅵ』
妹尾周三 2014b「備後における奈良時代の軒瓦－「備後国府系古瓦」の再検討」『考古学雑誌』第 98 巻第３号
妹尾周三 2015「軒瓦から見た伯耆国庁と国分寺の造営」『古代文化研究』第 23 号
妹尾周三 2016「軒瓦から見た備中国分寺の造営過程」『古文化談叢』第 77 集
日野浦弘幸 2003「末ノ奥窯跡」『山手村史資料編』
広島県教育委員会 1975『備後国分寺跡第３次発掘調査概報』
福山市教育委員会 2002『最明寺跡南遺跡－一般県道下御領新市線道路改良事業に伴う発掘調査報告書－』
府中市教育委員会 2010『前原遺跡－芦田駅家推定地の調査－』
府中市教育委員会 2016『備後国府関連遺跡１』
府中市教育委員会 2019『伝吉田寺跡－平成 30（2018）年度調査に関する報告－』
前島己基 1975「古代寺院跡」『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』
松尾佳子 2020「古代造瓦技術の変革－８世紀の備中国を題材にして－」『紀要』第１号
松江市教育委員会 2015『史跡出雲国分寺跡発掘調査報告書－総括編－』
松江市教育委員会 2019「出雲国分寺跡出土瓦の寄贈について」『平成 29 年度（2017 年度）松江市埋蔵文化財年報－松江市埋蔵文化財調査概要報告書－』
湊　哲夫・亀田修一 2006『吉備の古代寺院』（吉備考古ライブラリィ 13）
村上正名 1966「神辺町の古代寺院址」『備後国分寺』（神辺町文化財シリーズ No. ２）
毛利光俊彦 1980「日本古代の鬼面文鬼瓦－八世紀を中心として－」『研究論集Ⅵ』（奈良国立文化財研究所学報第 38 冊）
八木久栄 2010「後期難波宮の屋瓦をめぐって」『東アジアにおける難波宮と古代難波の国際的性格に関する総合研究』
山本忠尚 1998『鬼瓦』（日本の美術　第 391 号）
渡辺一雄 2004「長門深川廃寺」『山口県史』資料編考古２

図版出典

第１図：松尾作成。
第２図１～３：日野浦 2003。４：井内功 1968「角端点珠形式花弁の蓮華文つき棟端飾瓦について－岡山県・末ノ奥窯跡出土の棟端瓦－」『井内古文化研究室報１』。５：葛原克人 1986「216 箭田廃寺」『岡山県史』18 考古資料。
第３図１：葛原克人 1987「62 秦原廃寺」『総社市史』考古資料編。２：葛原克人 1986「216 箭田廃寺」『岡山県史』18 考古資料。３～５：妹尾周三 2010。
第４図：安東康宏・岩崎仁司 1997。
第５図１～３：倉敷市 1996『新修倉敷市史』第一巻考古。４：玉井伊三郎 1966『吉備古瓦図譜』。５：葛原克人 1986「219 備中国分僧寺跡」『岡山県史』18 考古資料。６・７：安東康宏・岩崎仁司 1997。
第６図：岡山県博 1974『特別展　岡山県の原始・古代』。
第７図１：津山市教委 1980『美作国分寺跡発掘調査報告』。２：津山市教委 2002『美作国分寺跡－塔跡発掘調査報告書－』。３：倉敷市埋文センター 2005『日畑廃寺』。４・５：長船町教委 1997『服部廃寺』。６～９：赤磐市教委 2009『備前国分寺跡』。10：田代健二 1988「備前市内採集の遺物について」『古代吉備』第 10 集。11：倉敷市 1996『新修倉敷市史』第一巻考古。12：岡山市教委 2005『史跡賞田廃寺跡』。
第８図：志賀作成。
第９図１・３：神辺郷土史研究会 1980。２：広島県立歴史民俗資料館 1988『ひろしまの古代寺院　寺町廃寺と水切り瓦』。４：妹尾 2009。

第 10 図 1 ～ 4：府中市教委 2019。5：岡遺跡発掘調査団 1972。6：広島県教委 1975。7：神辺郷土史研究会 1980。8：福山市教委 2002。9 ～ 12：府中市教委 2010。13：府中市教委 2016。

第 11 図 1：府中市教委 2019。2：府中市教委 2016。3：（財）広島県埋文センター 1984『下郷桑原遺跡』。4・5：三次市教委 1982『備後寺町廃寺－推定三谷寺跡第 3 次発掘調査概報－』。

第 12 図：志賀作成。

第 13 図 1：防府市教委 2002『平成 12 年度防府市内遺跡発掘調査概要』。2 ～ 4：杉原 2004。

第 14 図 1 ～ 3：倉吉市教委 2001。4：近江 1967。

第 15 図：志賀作成。

第 16 図：倉吉市教委 1970。

第 17 図：湯村功・中原斉 2018「岡益廃寺、岡益の石堂」『新鳥取県史（資料編）』考古 3 飛鳥・奈良時代以降。

第 18 図 1：鳥取県博 2003『鳥取県立博物館所蔵　古代寺院関係資料集』。2～4：琴浦町教委 2019『特別史跡斎尾廃寺跡Ⅰ』。

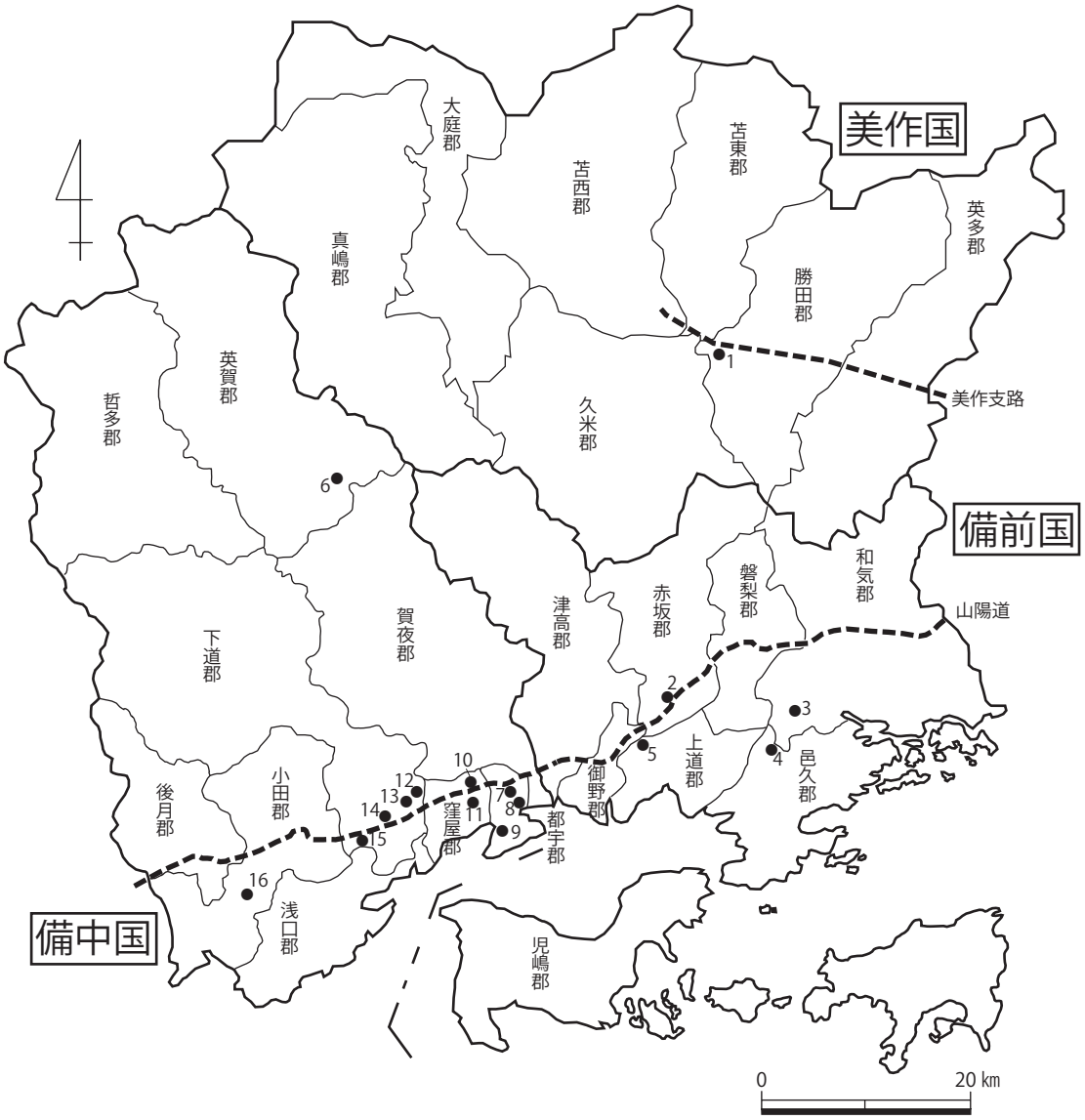
第 19 図：島根県教委 2002。

第 20 図：志賀作成。

第 21 図：松江市教委 2019。

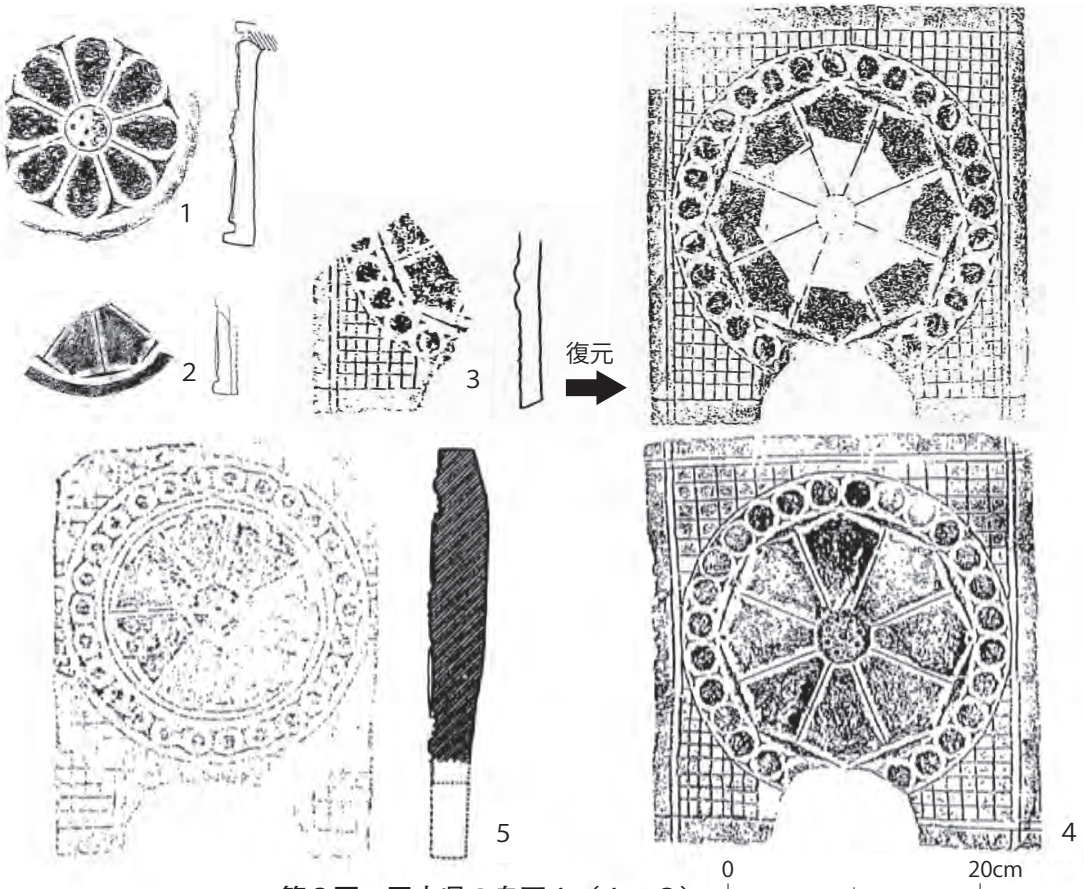
第 22 図 1・2：松江市教委 2015。3・4：島根県教委 1992。5・6：島根県教委 1983。7 ～ 9：前島 1975。10：島根県教委 2019。11：島根県教委 2009。

第 23 図 1：島根県博 1965『山陰の古瓦』。2・3：島根県教委 1988『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅴ－島根県松江市山代町所在・四王寺跡－』。4：松江市教委 1997『小無田Ⅱ遺跡発掘調査概報』。5：片岡 2012。6：平田市教委 1998『山根垣古墳・西西郷廃寺』。7：林健亮 2017「松江市坂本町澄水寺跡の再検討」『古代文化研究』第 25 号。8：島根県教委 1980『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』。9・10：花谷浩 2016「付論　三井Ⅱ遺跡の瓦窯と瓦について」『杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群』。11：浜田市教委 1993『下府廃寺跡』。



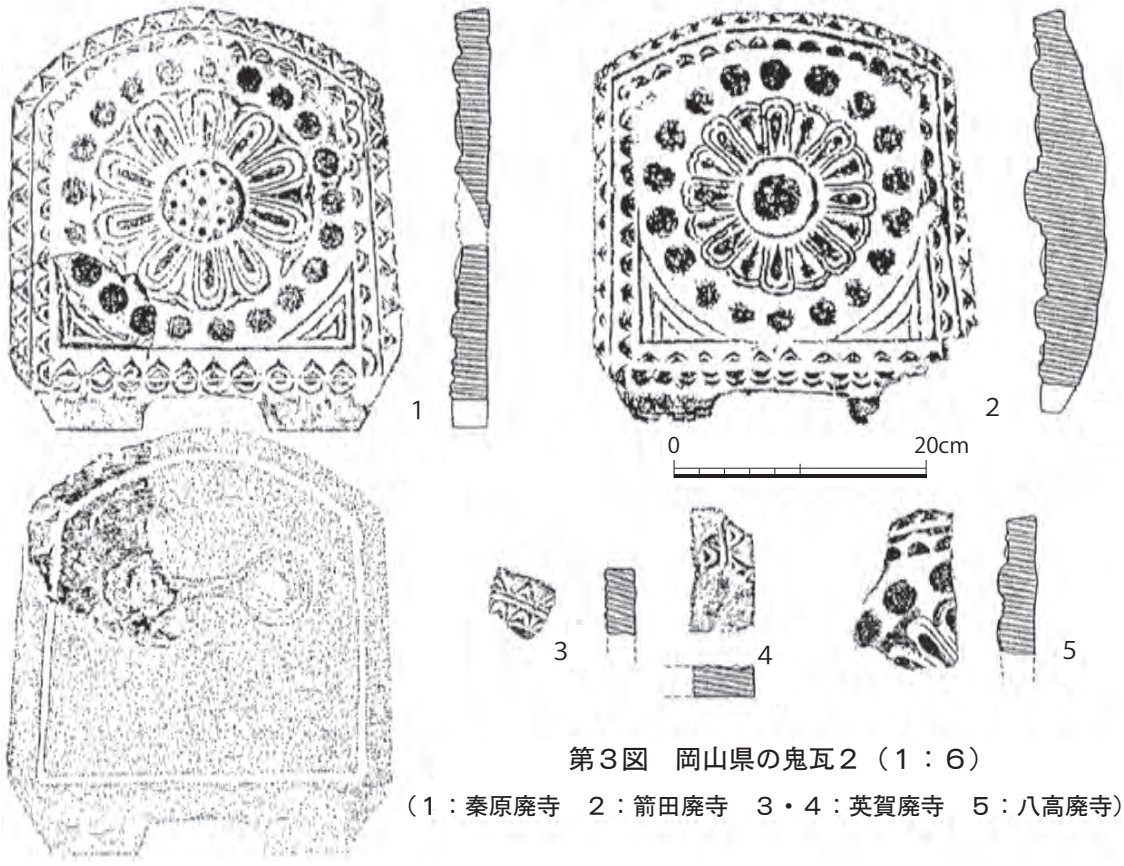
1：美作国分僧寺跡　2：備前国分僧寺跡　3：香登廃寺　4：服部廃寺　5：賞田廃寺　6：英賀廃寺
7：矢部遺跡　8：日畑廃寺　9：二子堂屋敷廃寺　10：備中国分僧寺跡　11：末ノ奥窯跡
12：秦原廃寺　13：岡田廃寺　14：箭田廃寺　15：八高廃寺　16：関戸廃寺

第１図　岡山県の鬼瓦出土遺跡（１：700,000）



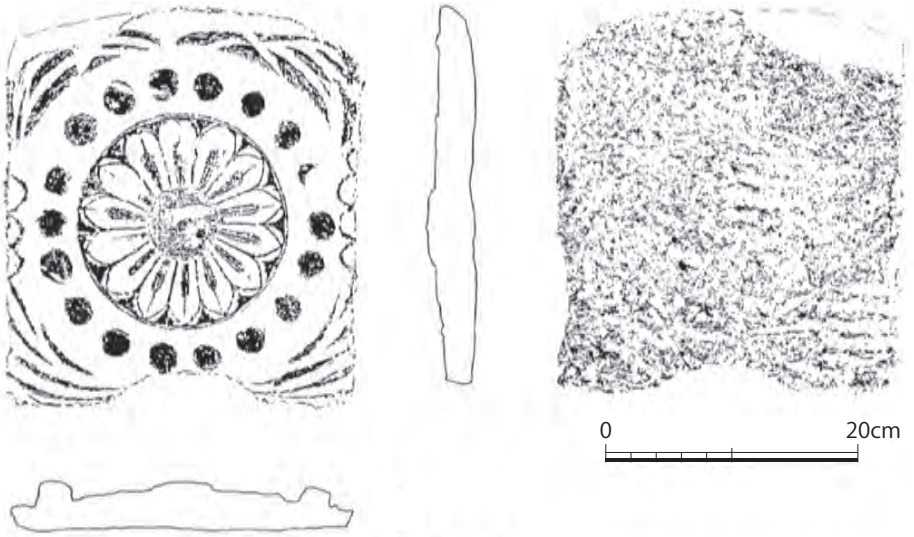
第２図　岡山県の鬼瓦１（１：６）

（１～３：末ノ奥窯跡　４：平吉遺跡 (参考)　５：箭田廃寺）

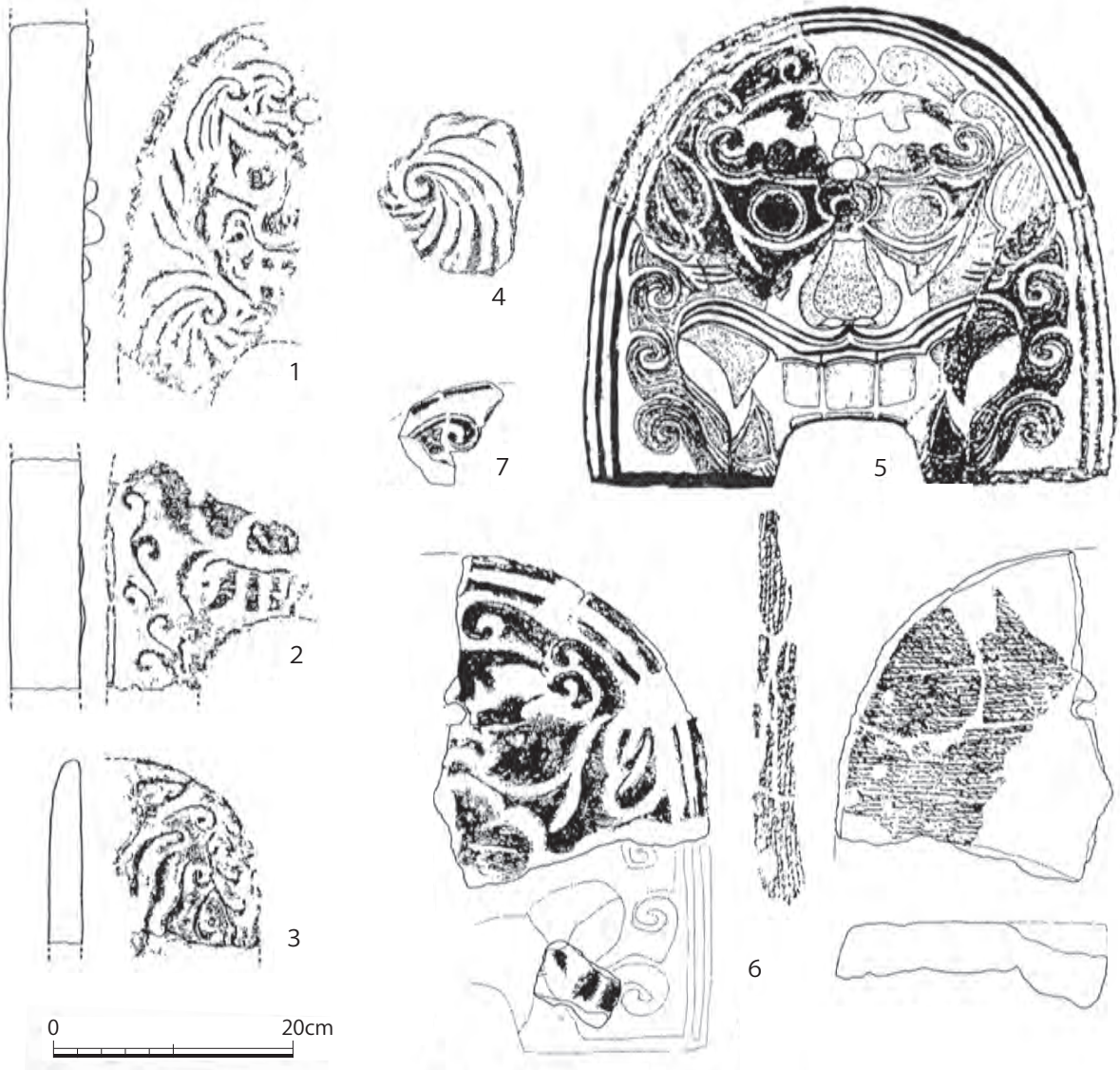


第３図　岡山県の鬼瓦２（１：６）

（１：秦原廃寺　２：箭田廃寺　３・４：英賀廃寺　５：八高廃寺）

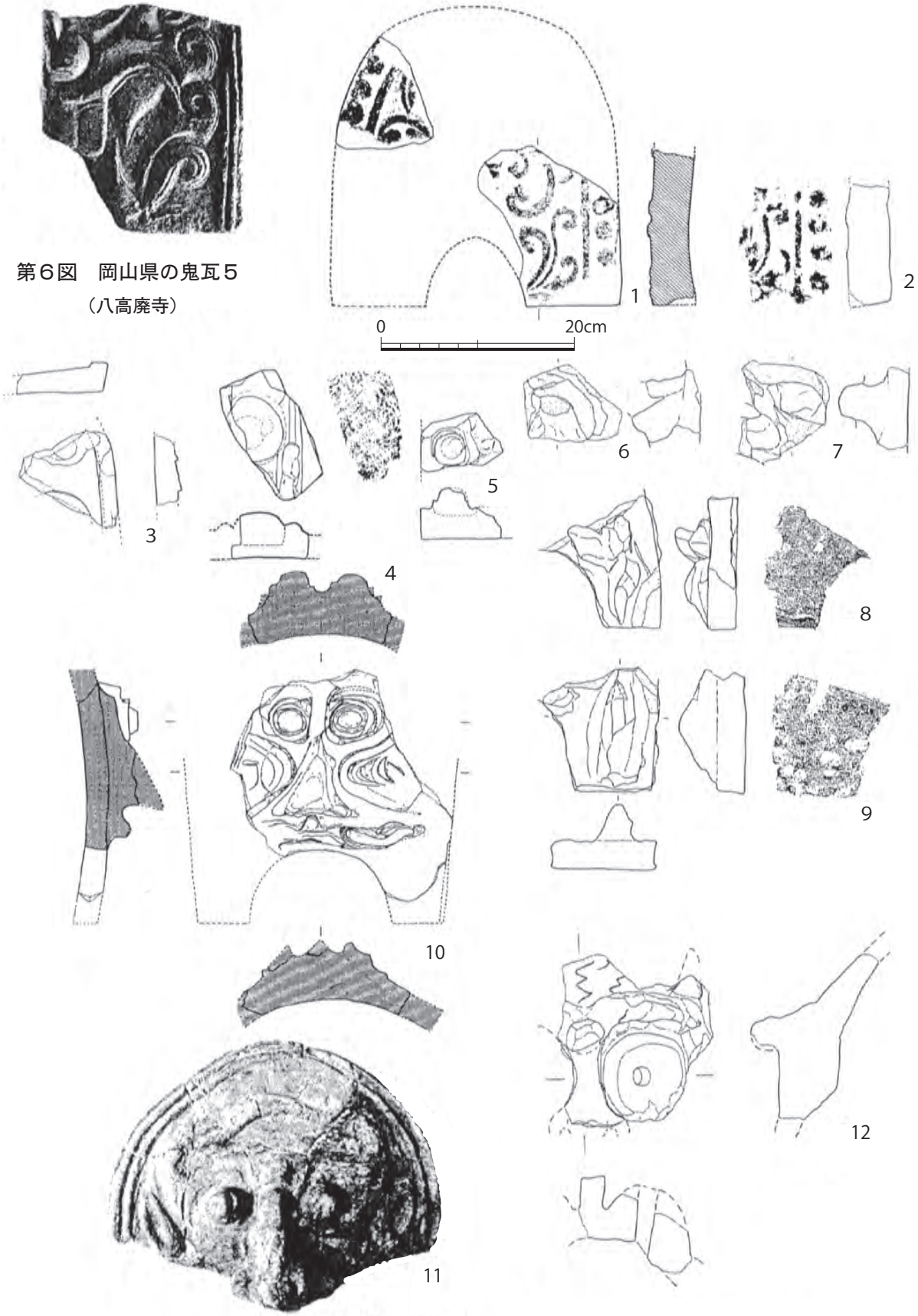


第４図　岡山県の鬼瓦３（１：６）
（関戸廃寺）

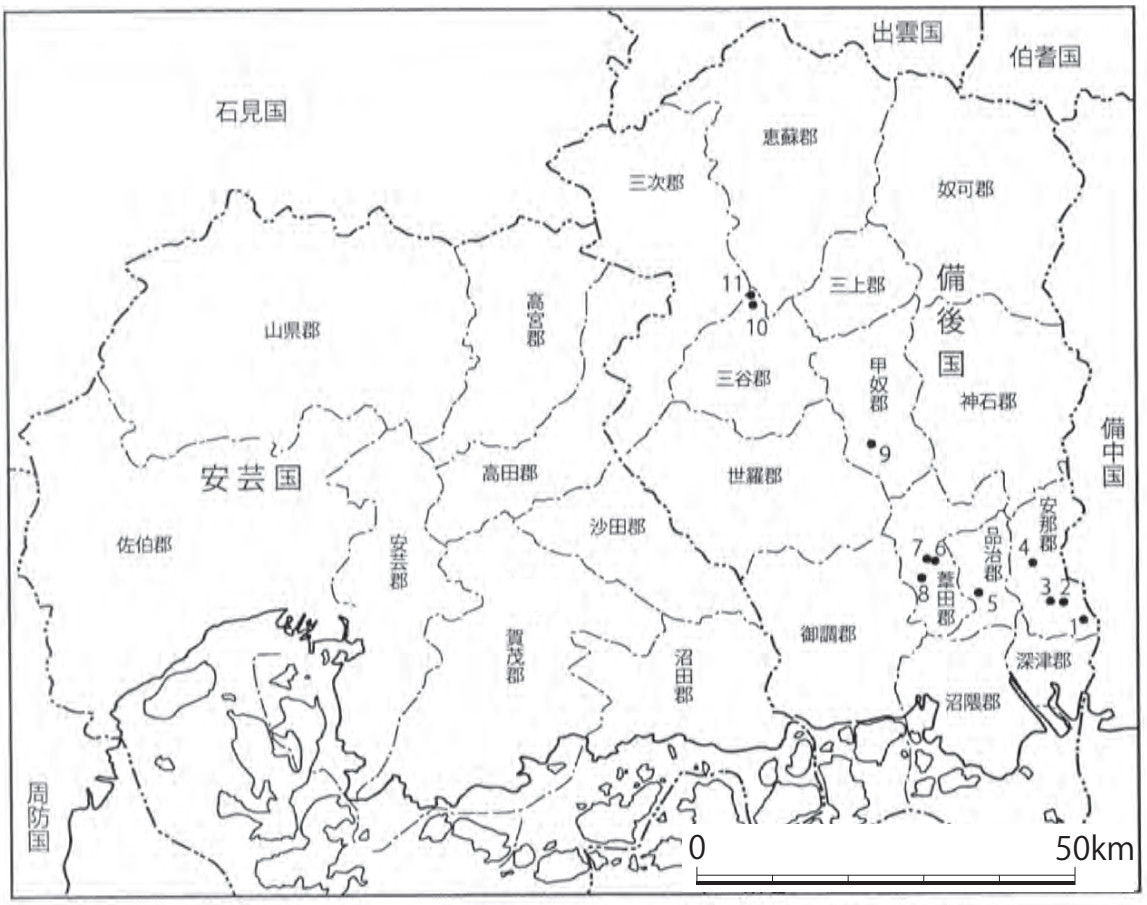


第５図　岡山県の鬼瓦４（１：６）
（１～３：矢部遺跡　４：岡田廃寺　５：備中国分寺跡　６・７：関戸廃寺）

第６図　岡山県の鬼瓦５
（八高廃寺）

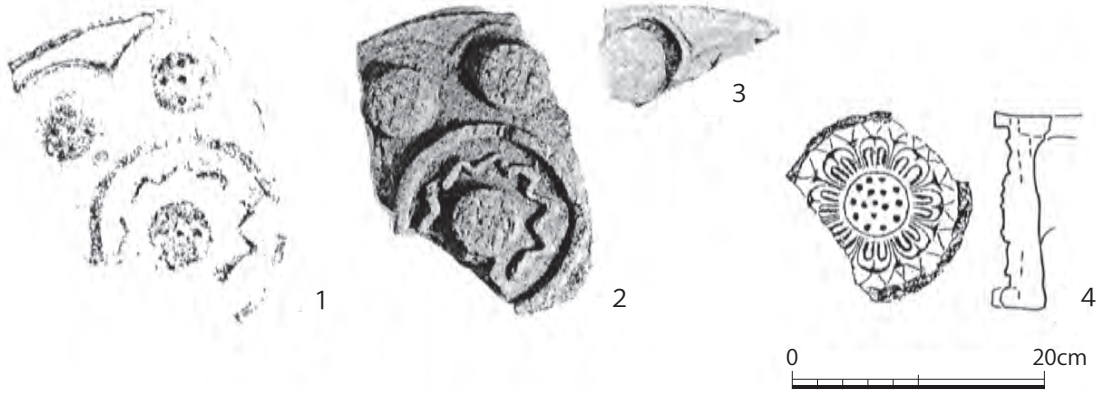


第７図　岡山県の鬼瓦６（１：６、11 は縮尺不明）
（1・2：美作国分寺跡　３：日畑廃寺　４・５：服部廃寺　６～９：備前国分寺跡
10：香登廃寺　11 ：二子堂屋敷廃寺　12 ：賞田廃寺）



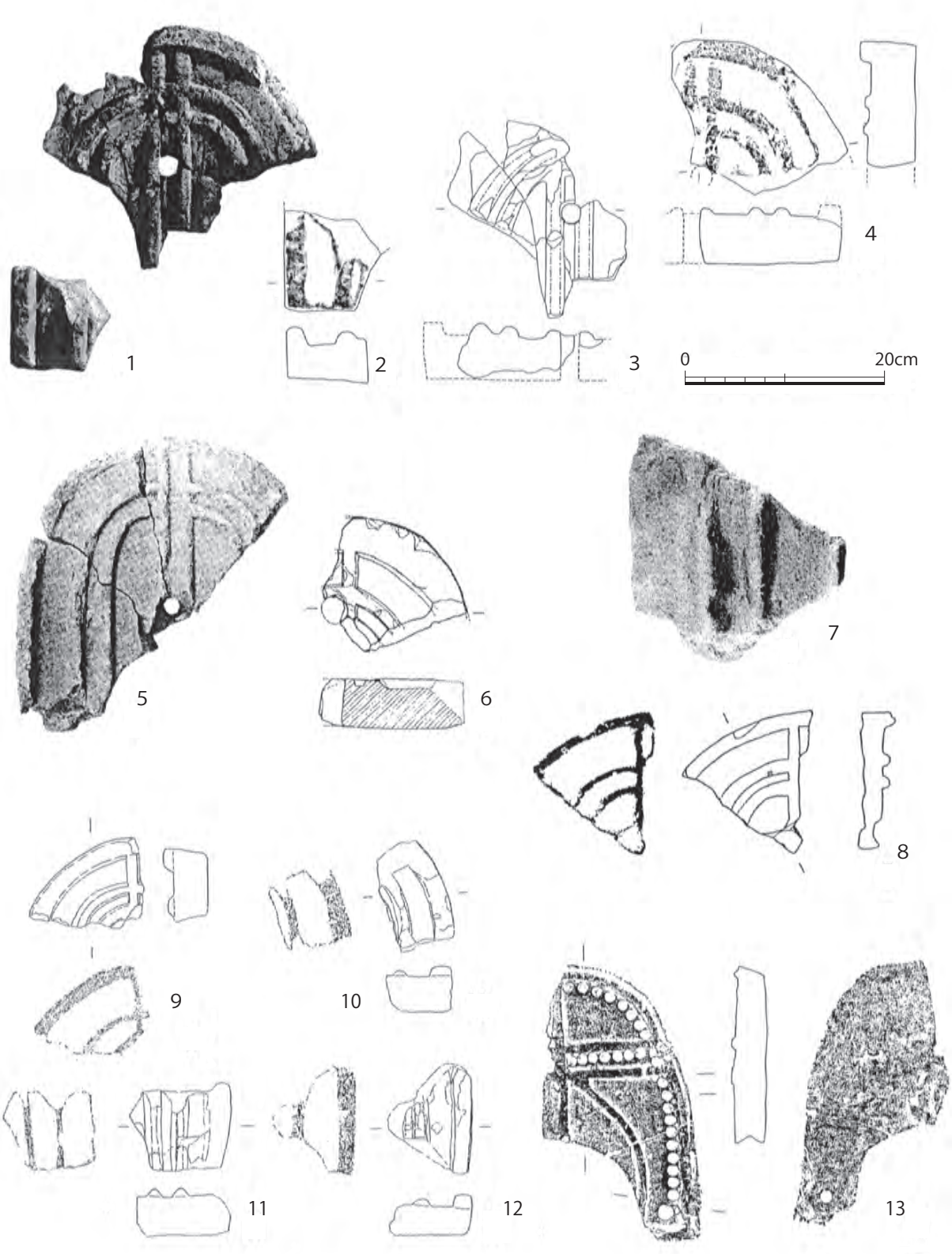
1：内砂子瓦窯跡　2：備後国分寺跡　3：小山池廃寺　4：岡廃寺　5：中島遺跡 (最明寺南遺跡)
6：備後国府跡　7：伝吉田寺跡　8：前原遺跡　9：下郷桑原遺跡　10：寺町廃寺　11：大当瓦窯跡

第８図　広島県の鬼瓦出土遺跡（１：1,000,000）



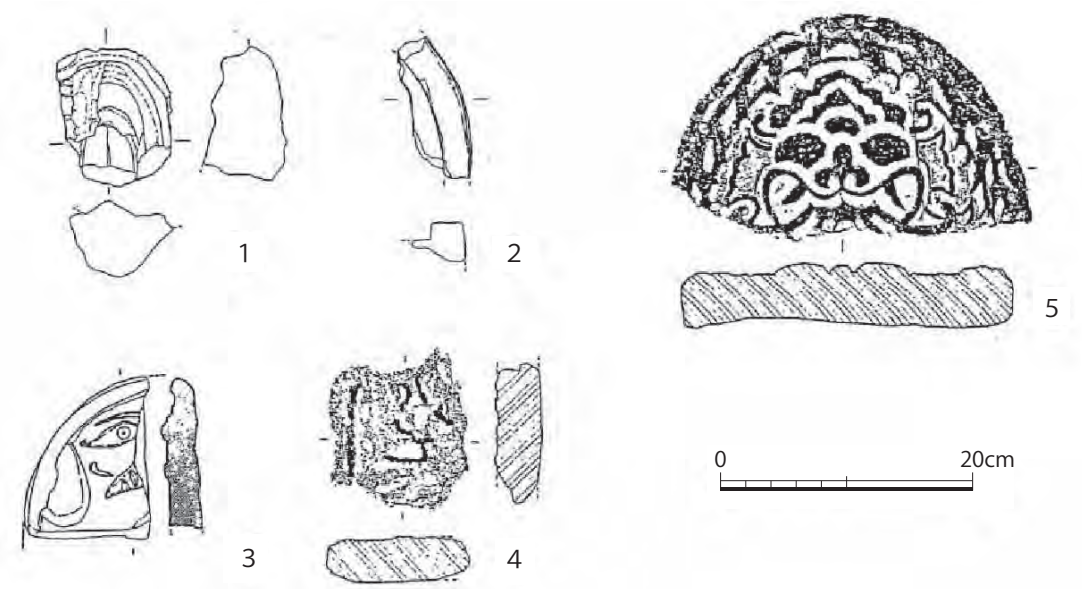
第９図　広島県の鬼瓦１（１：６）

（１～４：内砂子瓦窯跡）



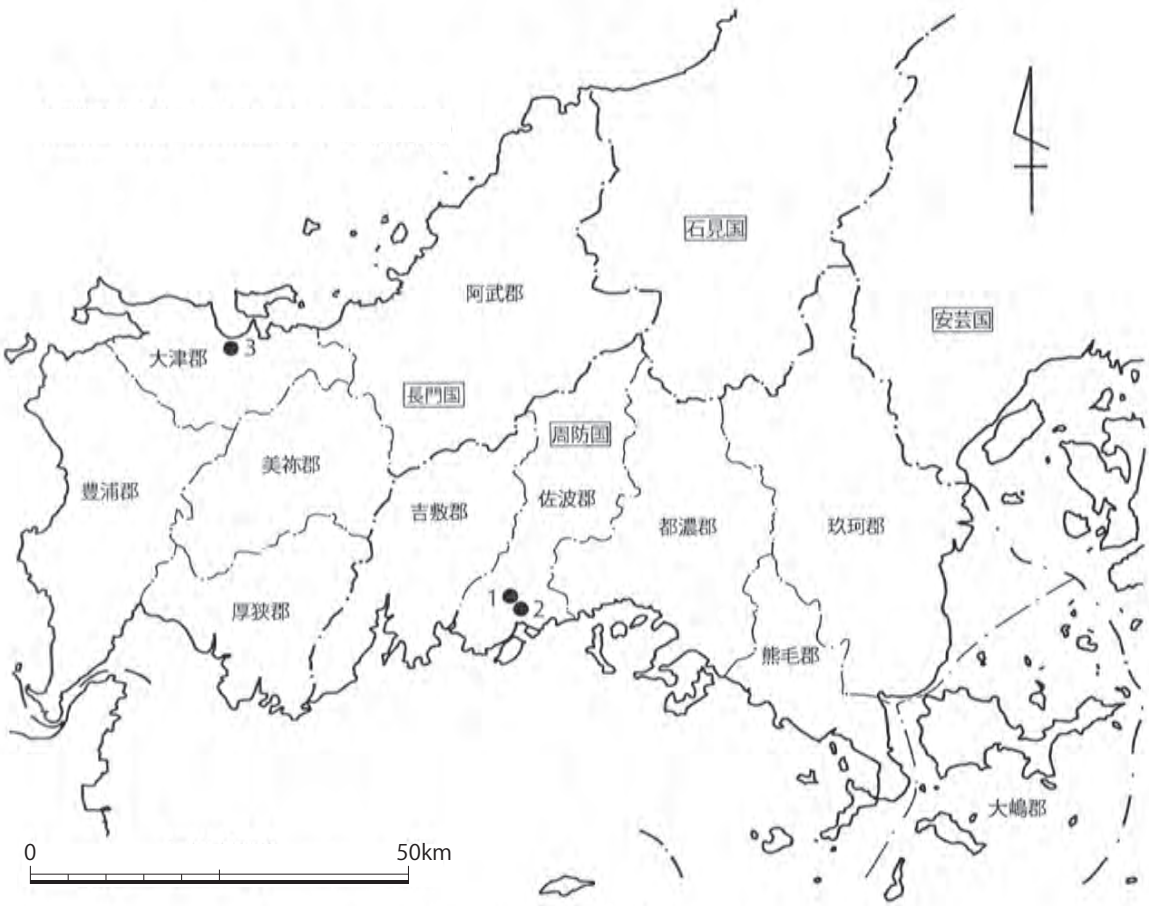
第 10 図　広島県の鬼瓦２（１：６　７は縮尺不明）

（１～４：伝吉田寺跡　５：岡廃寺　６：備前国分寺跡　７：小山池廃寺　８：中島遺跡
９～ 12：前原遺跡　13：備後国府跡金龍寺東地区）



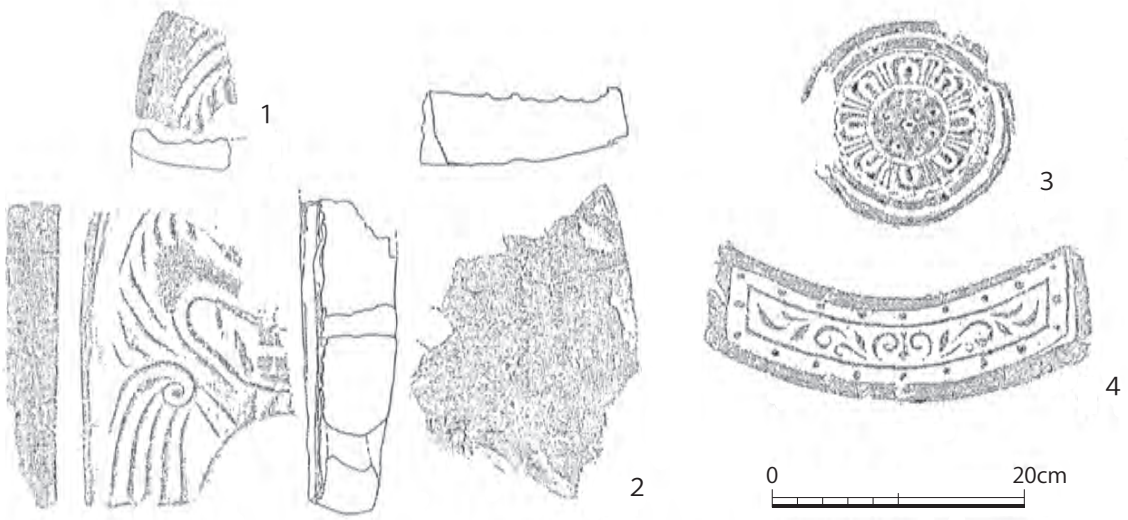
第 11 図　広島県の鬼瓦３（１：６）

（１：伝吉田寺跡　２：備後国府跡ツジ地区　３：下郷桑原遺跡　４：寺町廃寺　５：大当瓦窯跡）



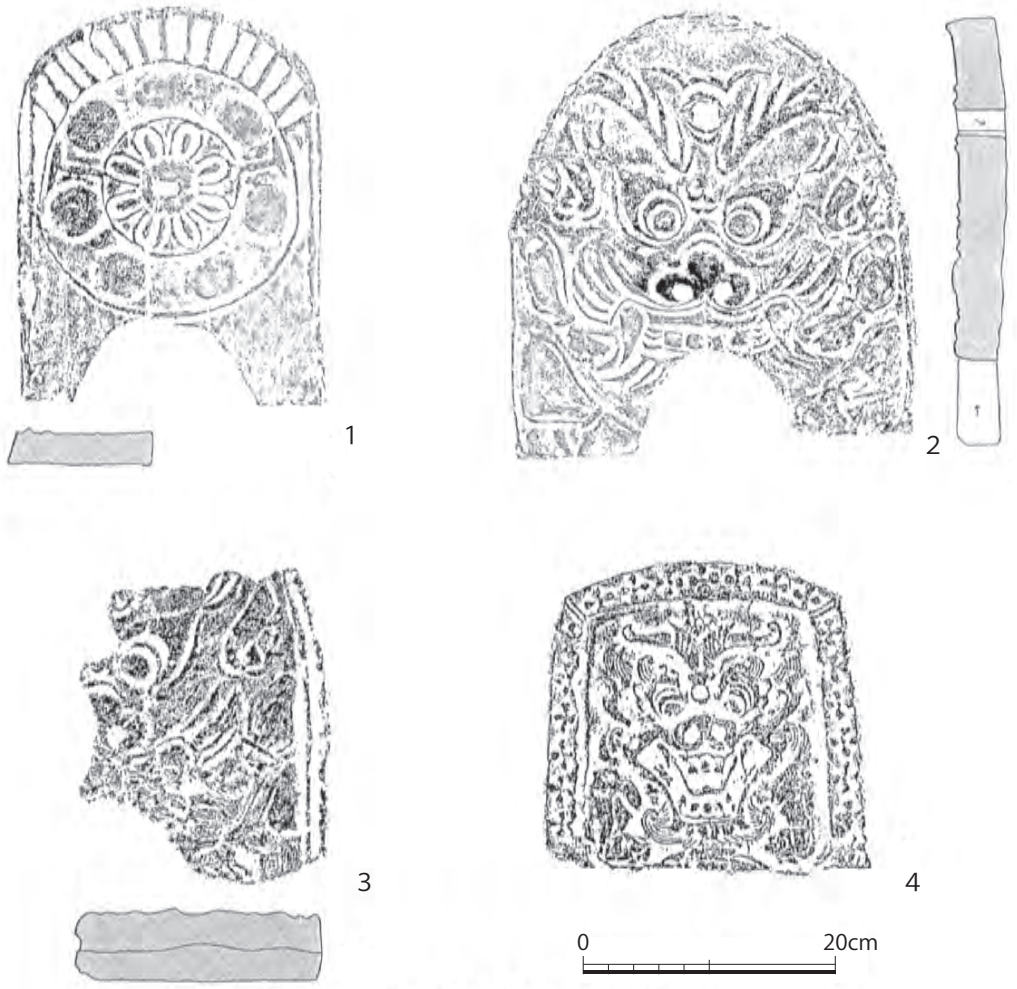
１：周防国分寺跡　２：周防国府跡　３：長門深川廃寺

第 12 図　山口県の鬼瓦出土遺跡（１：1,000,000）



第 13 図　山口県の鬼瓦（１：６）

（１～４：周防国分寺跡）



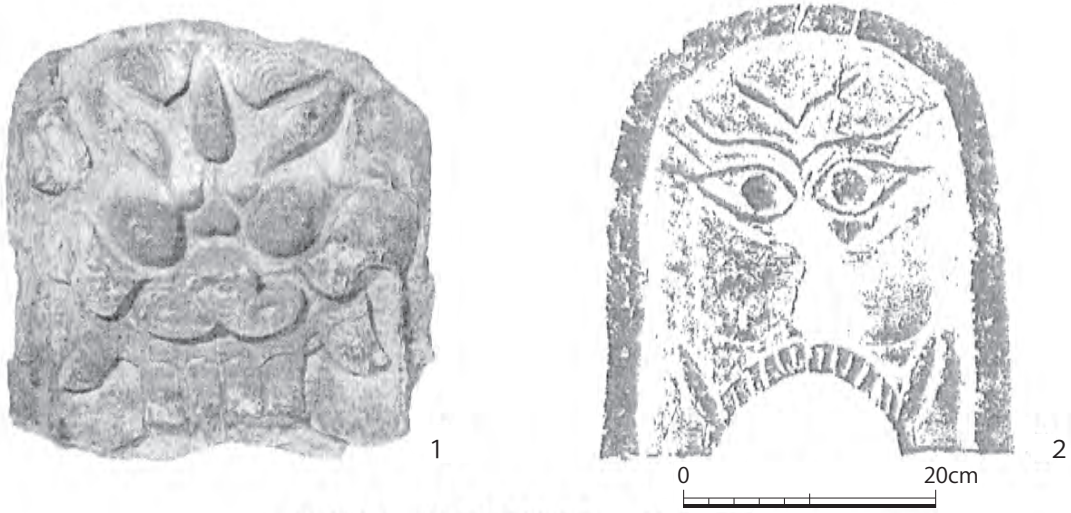
第 14 図　鳥取県の鬼瓦１（１：６）

（１～３：大御堂廃寺　４：慶州付近出土〔参考〕）



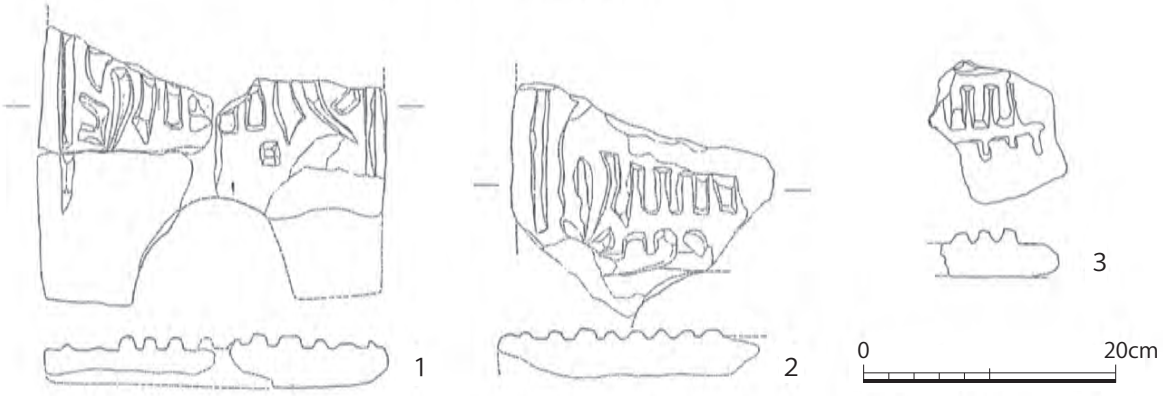
第 15 図　鳥取県の鬼瓦出土遺跡（１：1,000,000 ）

（１：岡益廃寺　２：大御堂廃寺　３：伯耆国分寺跡　４：斎尾廃寺　５：大寺廃寺）



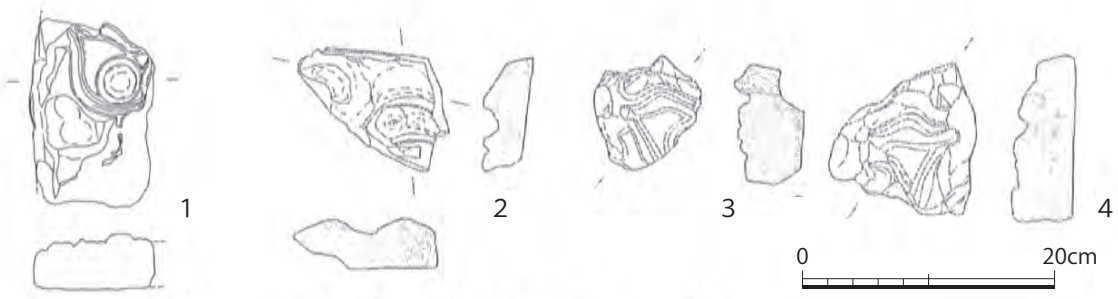
第 16 図　鳥取県の鬼瓦２（１：６）

（１・２：伯耆国分寺跡）



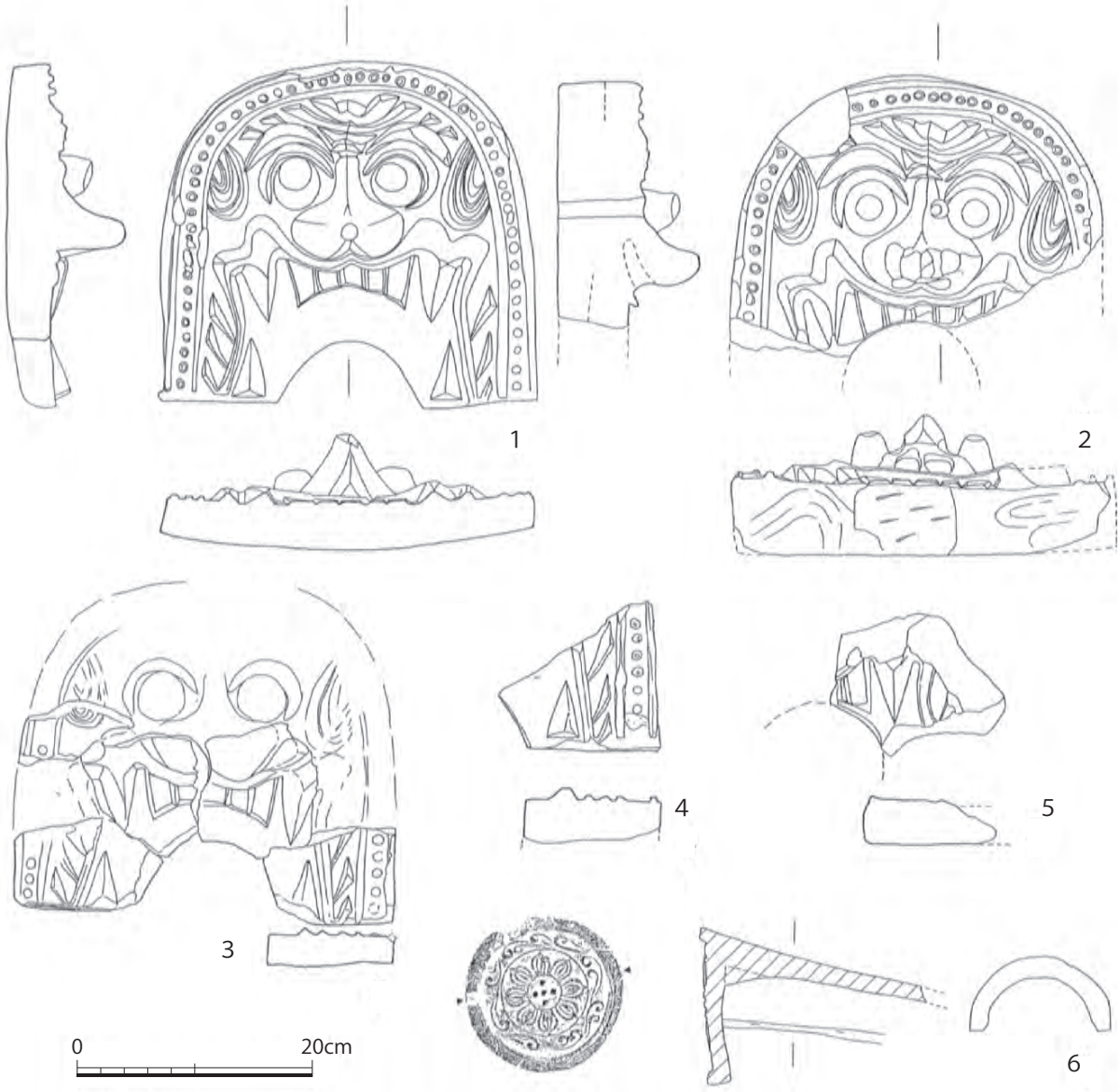
第 17 図　鳥取県の鬼瓦３（１：６）

（１～３：岡益廃寺）



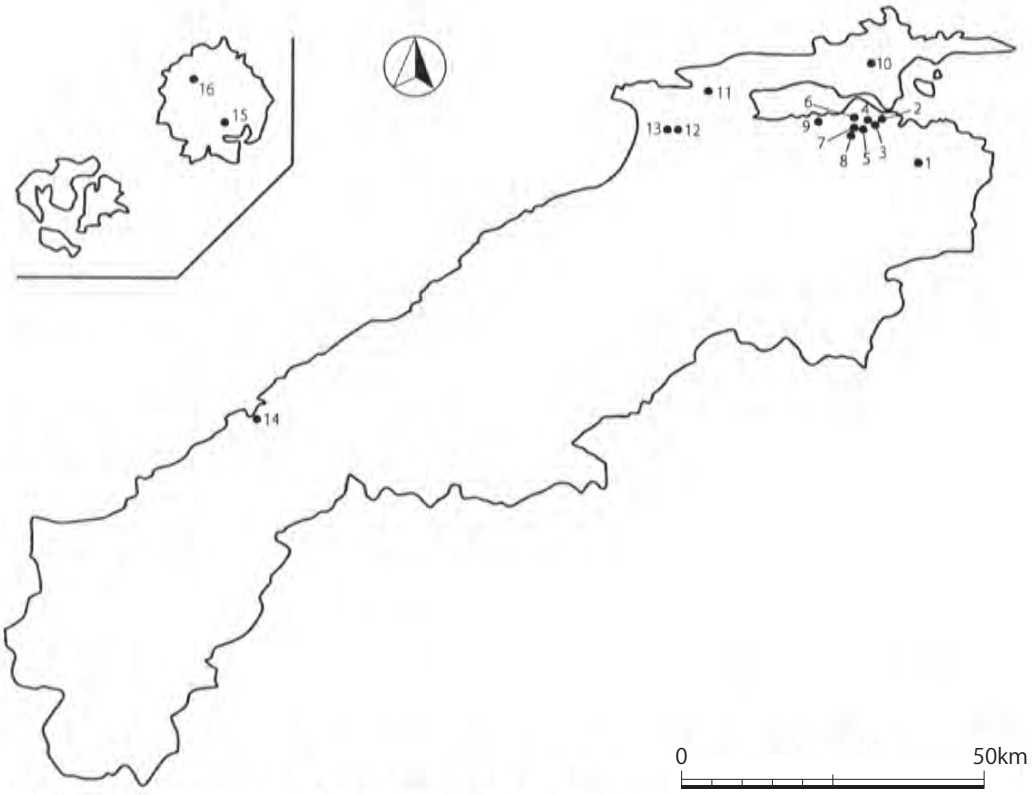
第 18 図　鳥取県の鬼瓦４（１：６）

（１～４：斎尾廃寺）



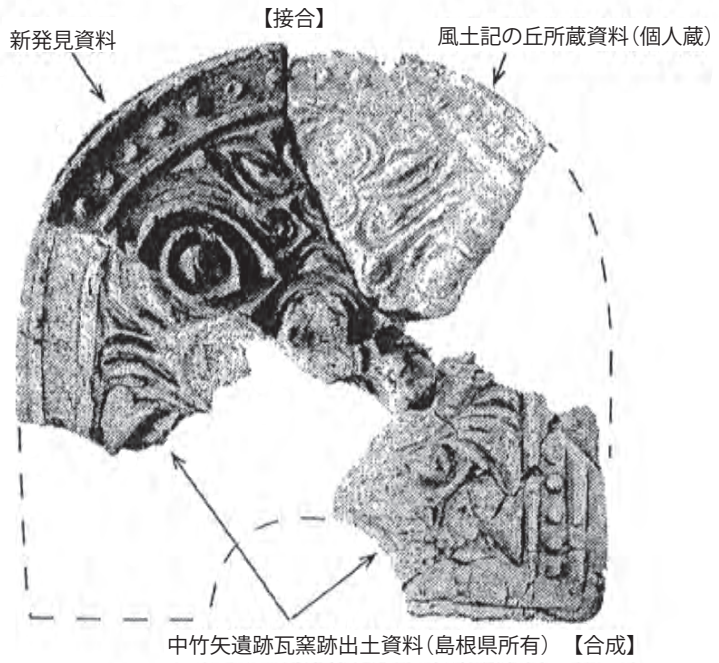
第 19 図　島根県の鬼瓦１（１：６）

（１～６：来美廃寺）



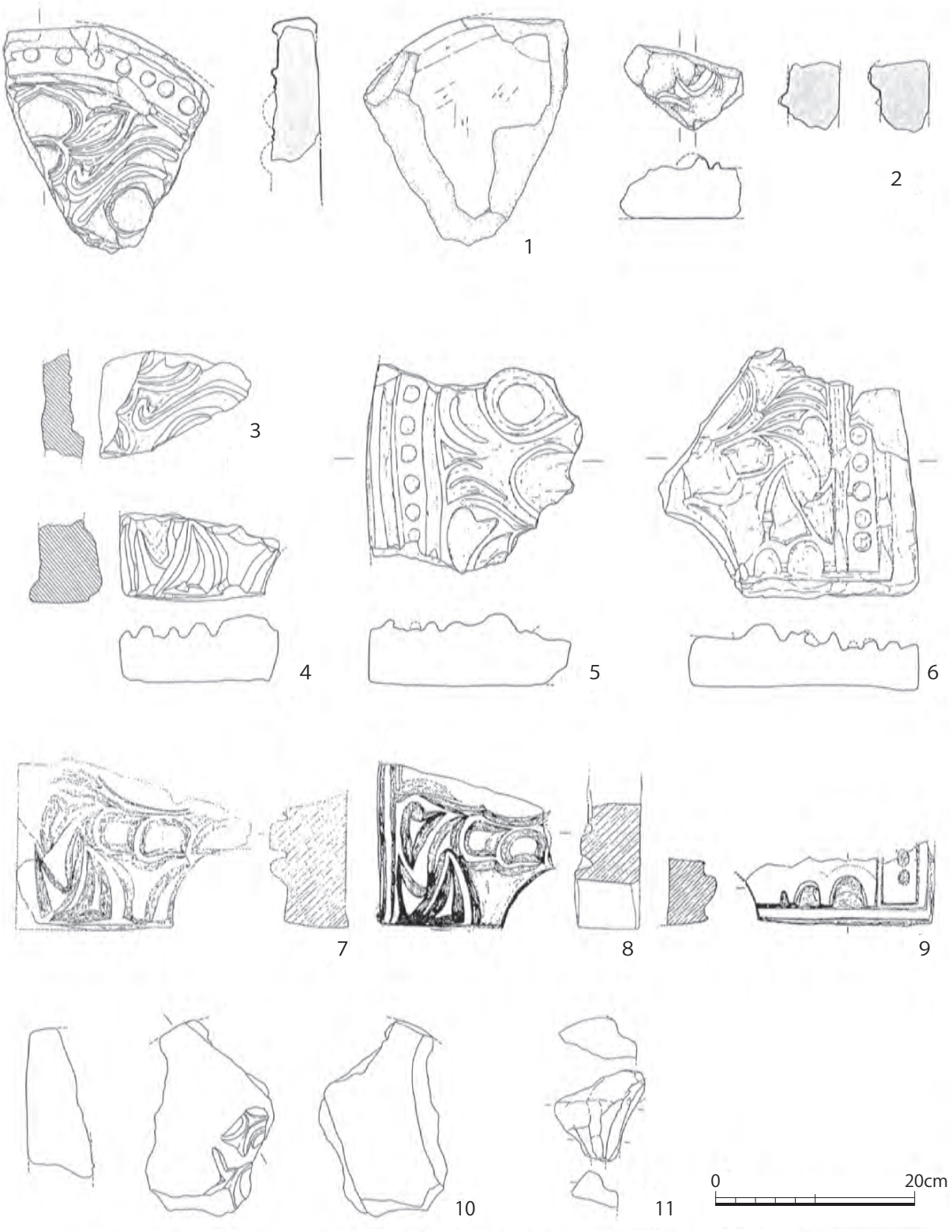
１：石原遺跡　２：出雲国分尼寺跡　３：中竹矢遺跡　４：出雲国分寺跡　５：出雲国府跡
６：来美廃寺（山代郷北新造院跡）　７：四天寺跡（山代郷南新造院跡）　８：小無田Ⅱ遺跡（山代郷南新造院瓦窯跡）
９：松ノ前廃寺　10：坊床廃寺　11：西西郷廃寺　12：長者原廃寺　13：神門寺境内廃寺　14：下府廃寺
15：隠岐国分寺跡　16：犬町廃寺

第 20 図　島根県の鬼瓦出土遺跡（１：1,250,000 ）



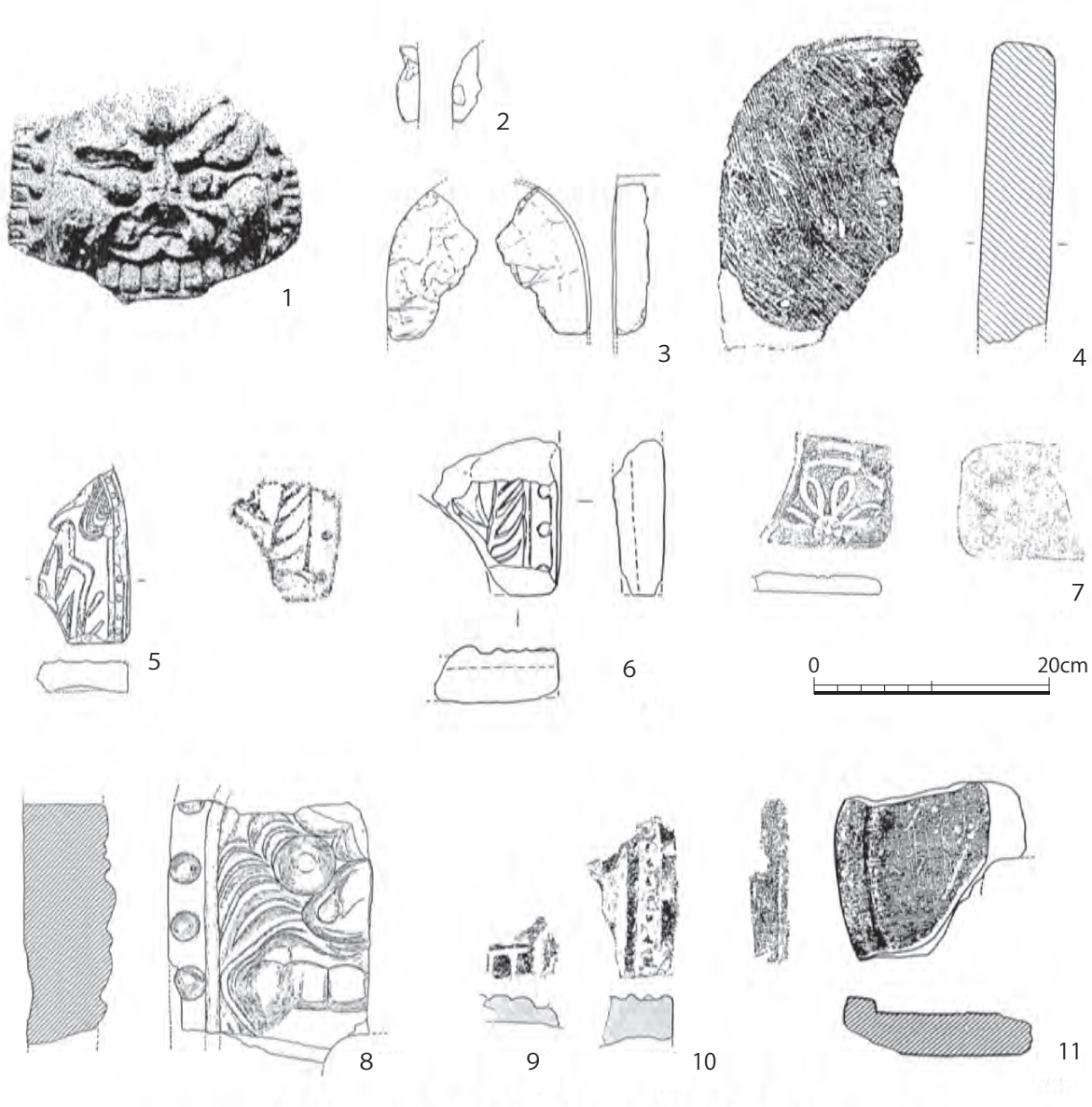
第 21 図　島根県の鬼瓦２（縮尺任意）

（出雲国分寺跡出土鬼瓦復元図）



第 22 図　島根県の鬼瓦３（１：６）

（１・２：出雲国分寺跡　３～６：中竹矢遺跡　７～９：出雲国分尼寺跡　10・11：出雲国府跡）



第 23 図　島根県の鬼瓦４（１：６　１は縮尺不明）

（１：石原遺跡　２・３：四天寺跡　４：小無田Ⅱ遺跡　５：松ノ前廃寺　６：西西郷廃寺
７：坊床廃寺　８：長者原廃寺　９・10：神門寺境内廃寺　11：下府廃寺）